

---

# 暇な魔王の一日

ziFuka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暇な魔王の一日

### 【Nコード】

N9968N

### 【作者名】

z i F u k a

### 【あらすじ】

「はあ。なんでおまえらは弱えの？ つまんねえんだけど」

愚痴を言う魔王の目の前にいるのはボロボロの勇者。

テラスには4人の姫が観戦している。

これは、暇な魔王のとある一日。

（前書き）

初投稿です。下手な所はこれから精進していききたいと思っていますので、よろしくお願いします。

「んなこと言ったって努力しねえんだろ？」

「魔王様、きっと建前ってやつですよ」

「そうそう」

「口だけなのよ」

「……………」

「皆さん言いたい放題ですね……………」

誰がどのセリフを言っているのか分かりますかね？

後で当てはめてみてください。当てはめた人は暇人です（笑）  
とりあえず、始まりです。

「なんでおまえら“勇者”ってのは、弱っちいのに次から次へと来んのかね？」

そう言い放つ魔王。と、言うよりは魔王のような格好をした青年にしか見えない。

今、魔王は玉座に座っていた。

目の前にいるのは魔王を倒して世界を救うはずの勇者がボロボロになってこちらを睨んでいる。

「おまえを倒せば、みんな幸せになるんだ！！ このくらいで、負けてたまるかぁ！！！」

勇者が剣を構え、魔王に突きを放つ。

「へいへい。そうですか〜っ」と

それを指で軽くあしらう魔王。

「くそっ！ このっ！ せやっ！」

「ふああ〜あ。遅っせ〜なあ〜」

勇者の攻撃は魔王に何度もかわされる。

「そろそろさあゝ。諦めて出直したら？」

「仲間の犠牲は無駄にはしない！！」

勇者の仲間はうしろで倒れている。全員魔王にやられたのだ。

「天の神々よ、我に悪を討つ光の力を！」

勇者は魔法を唱え、剣を振り下ろす。

「ヘヴンホーリー！！」

天からふりそそぐ光が槍となり、魔王に向かう。

「闇よ、我が手に集い、光をかき消せ」

魔王の右手に黒い闇が集まる。

ライトイーター  
「光喰」

魔王の振るった手から闇が飛び出し、天から降ってくる光を飲み込み、消す。

「なっ！！」

「だからさあゝ、仲間を連れて出直したら？ そいつら寝てるだけだぜ？」

「なにっ!？」

魔王の発言にビクツと一瞬動く仲間たち。そう、魔王が気絶させただけである。

「力の差を感じて嫌になったんだろぅなぁ。でなきゃ目が覚めてんのに倒れたふりなんてしねえもんな？」

「お、おまえら……」

涙を流す勇者。

それもそのはず。一人で必死に戦っていたのに仲間はその間倒れたふりをしていたのだ。

誰だっ て泣きたくなる。

「と、いうわけとつとと帰れ。おーいバトラー、いるかぁ？」

すると、一人の角の生えた青年が現れる。

「なんでしょうか？」

「こいつらを送り返せ。あ、あまり早く帰って来ないようになるべく遠くに送れ」

「わかりました」

「くそっ、まだ俺は諦めてなんかいないっ！ 魔王、覚悟おっ！」

剣を構えて再び突撃してくる勇者。

「はあ。今度はもつと強くなってから来いよな。相手したくないから」

そう言い出す魔王。勇者の耳元で。

「!？」

いつのまにか玉座から勇者のすぐ横にいった魔王が勇者の頭に手を当てて一言。

「おやすみ」

「っ!？」

倒れる勇者。魔王の魔法によって気絶させられたのだ。

「それじゃあ、送っちゃって」

「了解」

バトラー、と呼ばれた少年は魔法を唱える。

「彼らに空駆ける足を授けたまえ。ミグレイト」

勇者たちの体が水色の光に包まれ、消える。

「よし。上出来だ。ちなみにどこへ送ったんだ？」

「あの勇者の故郷のミルト村です」

「いいぞ。あそこなら戻ってくるまで数ヶ月はかかる。これでしばらくは安心だ」

「……毎度思つのですがよろしいのですか？ あなたは仮にも魔王ですよ？」

そう、彼は魔王である。なのに今勇者を殺さず、故郷へ帰し、さらには勇者が来ないことを喜んだ。

勇者が来ないことを喜ぶのはいいのだが、その理由が『つまりない』というからだめなのだ。

さらに実は彼、魔王なのに何もしない。世界は確かに征服しようとはしているが、そのために命令やら、国の王を殺したりとか、そういう事を一切しないのだ。

「だって俺は親父から受け継いだだけじゃあねえか。勇者が襲ってくる理由も親父がさらって来させたお姫様を救いに来てるだけだろう？ まあ、さっきのは違ったみたいだが」

「そうですが……」

「別にいいじゃねえか。親父も母上と魔界でバカンスを楽しんでいる事だし？ それにくらべりゃあ勇者どもの相手をしてやってんだからいいと思え」

「はあ……」



「そういや、姫さん方は何してんだ？」

「あそこで勇者の鑑定をしてますよ。なんでもどの子に救って欲しいかを見定めているそうです」

バトラーの指さした方向にはテラスのような所からこちらを見ている姫の格好をした4人の女がいた。

「ずいぶんと余裕だなあ。まあ連れ去られてから数年もたちやあそうなるか」

「逆に私は困りますがね」

連れ去られたお姫様たちは親父、今の魔王の父の時から特に牢獄へ監禁されたり、ひどいように扱われておらず、自由に生活していた。

脱走を試みる者もいたが、帰り方が分からず、結局帰ってくるのが大半だった。

「そんじゃあ、お姫様たちにも会いに行くかな」

魔王が帰ろうとしたとき、突然正面の大きな扉がバンという音とともに勢いよく開かれる。

「魔王はどこだああ!!」

「またかよ……」

「頑張ってください。魔王様」

また現れた勇者に頭を抱えながらも、相手をする魔王であった。

「あの子はだめねえ。 “勇者” っていうよりも “蛮勇” っていう方が良くない？」

「そうだね。武器もなんだかゴツいし」

「と言うよりなんで斧なんて持つてるんでしょうか？」

「あれじゃない？伝説の剣が見つからなかったから一番強そうな武器を選んだのか、それとも単に好きなだけとか？」

「そうだったとしてもやっぱりだめねえ。かすりもしてないじゃない」

「あの方のお仲間は何をしてるんでしょうか……？」

「見たところ、魔法の詠唱か、タイミングをうかがっているのか」

「……どちらにせよ、あれじゃ勝てない」

「別にあの子たちが負けてもいいんじゃない？ 私たちももうなれたことだし」

「そうそう」

「……」

「みなさん、それでいいんでしょうか……」

勇者の品定めをしに来ていた四人の姫。全員あちこちの国から連れてこられたお姫様である。

唯一、丁寧な言葉遣いを残している姫、チル姫がそう言うと、

「だって私何年目だと思ってるの？　さらわれてからもう2年は経ってるよ？」

「私なんてもう4年目よ？」

オレンジの髪の姫、アローネと大人の雰囲気をただよわせる姫、ミリムが諦めたように答える。

「……私はまだ2ヶ月」

ぼそりと、すこし小さな声でしゃべる姫、ルナも後から答える。

「そ、そうなんですか……」

ちなみにチル姫は一番短くて、さらわれてからまだ二週間も経っていない。

今そこで戦っている？魔王がその座を彼の父、ヴォルザス・ド・ザインから受け継いだのは一週間前。

ヴォルザスは息子、レオン・ド・ザインにむりやり魔王の座を渡し、人間の妻アリーシャと二人で魔界にバカンスへ出かけている。本当の名前は二人とも長いので省略。

「ヴォルザス様は素敵なお方だったわあ。連れ去られて何をされるか不安だったけど、私を見て『おまえはもう自由だ。我が輩の城で好きに暮らすが良い。あの王にはもったいない逸品だ。』って。レオン君とは大く違い」

「本当だね。レオン君なんて平気で『おまえら、いつまでいるんだよ?』なんて言うしね」

「そうそう。器が小っちゃいくせにあれでも息子なのよね」

「いったい何を親から受け継いだんだろうね?」

「……絶大なる魔力と最強の力?」

「そんなもん私たちには関係ないわよ? いまだってその、絶大なる魔力”であの蛮勇を弄んでるわよ?」

レオンは幻術で蛮勇と言われた勇者を虐めていた。

「あれだけの力があるのになんで世界征服! 魔界の王! 世界滅亡! とかやらないんだろ?」

「本人曰く、『はあ? なんでそんなつまんねえようなことを俺がするんだよ』だって」

「それがつまらないことで助かりましたよ……」

「……私はやってほしい」

恐ろしいことを言うルナ姫。レオンの方はなにやら愚痴を言っている。

「ああゝあ。また始まったみたいねえゝ」

「今日、何回目なの？ レオン君の愚痴浴びせ」

「たぶん12回目だとおもつわよゝ？」

「よく愚痴が尽きないねゝ」

「浴びせられる相手の気持ちを考えて欲しいわねゝ」

「無理じゃない？ あの器のちっちゃいレオン君だよ？」

「そうねえゝ」

その間にもレオンは3人いた勇者の仲間には蹴りを加え、勇者には奪った斧で殴っていた。

ここまで聞こえてくるのはレオンの怒鳴り声と愚痴。例えば「弱いクセに来るんじゃないねえ！」など。

「今度の勇者もこれで終わり、かゝ」

「あの方たちは大丈夫なんでしょうか？」

あつという間にレオンによってボコボコにされた勇者改め蛮勇一行は近くにいた執事のバトラーにどこかへ魔法で送られていた。

もちろん行き先は遠い所である。

「愚痴言つくせに殺さないのが不思議なのよね」

「そうそう。馬鹿なんじゃ、って、前から馬鹿だったね」

「何もない所で転んだり、魔法を暴発させて辺り一面焼け野原にしたり、ドジっ子だからねえ」

「……ドジ」

「レオンさん、意外とかわいい所もあるんですね」

「……言いたい事は、それだけかな？」

『……!!?!?』

いつのまにか四人の前に現れたレオン。足下には何もないのに浮いている。

背中には悪魔の羽が生え、顔が悪魔のような笑みになっている。まさに魔王降臨である。

「俺のことを馬鹿にした、してしまった、哀れな人は誰かな？」

「あわわ、あわわわわわ」

「わっ、私は違うわよ！？　そのチルちゃんがっ、か、勝手に」

「ええっ！？　私は何も言ってますよっ！？　ミリムさんとアローネさんが……」

「ちっ、違うわよ！？　私に罪を着せないで！！」

「チルちゃんは嘘なんてつかないよねえ？」

「ひいっ！！　つきませんつきませんっ！！　嘘なんて言いませんっ！！」

魔王から発せられるものすごい鬼気に震え、急いで返答するチル。魔王の後ろに何かが見える。

「だってさ？　そのオレンジは分かったけどお、君は、どうなんだい？」

魔王の今にも紅く光りそうな瞳がミリムに向けられる。

「誠に申し訳ありませんでしたー！！……謝ったから、いいわよね？　ね？」

「はっはっは。……いいわけ、ねえだろうがあああああっ！！」

「た、退却っ！？　戦闘離脱！？　とにかくやめてー！！？」

そういつて逃げるミリムをどす黒いオーラを出しながら魔王が追いかける。

「はははははっ！！ 逃げられると、思ってたのかあああああ  
あああ！！！！？」

「きゃあーーーー！！？ 誰か助けてーーーー！！」

悲鳴を上げながら逃げるミリムを猛スピードで魔王が追いかけていく。

「あわわわ……はっ！」

ミリムの悲鳴が遠くなっていった時、アローネが我に返る。

「今のうちに私も逃げないと！ ミリム姉さん、あなたの分まで私が生きるよ！ さようなら！！」

アローネが涙を流すフリをしながら魔王の向かった方向と逆の方  
向へ急いで逃げようとすると、

「逃げられるワケないでしょ？ お嬢ちゃん？」

「きゃああああああ！！！！！！」

いつの間にかアローネの背後に現れた魔王がいつもと違う口調で  
話しながらアローネを捕まえる。

「いやっ！ 離してっ！ 痛いのはいやあああ！！」

「だったら牢獄にぶちこんでやろうか？ 骸骨がたつくさんあ



るよ？」

「それもいやーーーー！！！！！！」

「嫌よ嫌よも好きのうちってねえ。さあ、牢獄へレッツゴ」  
「！」

「いやああああああああああ！！！！！！」

もう死神にも見えてくるレオンに引きずられながら連れて行かれるアローネ。

その惨劇を見ていた2人というと、

「……こ、怖い……」

「レオンさんは絶対に怒らせないようにしよう……」

久しぶりに見る魔王の怒りモードに驚くルナと、絶対に嘘はつかないと心に決めたチルであった。

「……………はあ。暇だ。暇すぎる。」

哀れな2人に裁きを下した後、レオンはまた玉座に座っていた。

ここからでは見えないが、もう夜だろう。たいまつに火がついている。

なぜ彼がまたここに座っているのか、それは、

「……ここが魔王の城か？」

「……弱そうだなあ。相手したくねえなあ」

また一人現れる勇者。期待を込めてここに座っているのだが、全然強い勇者はこない。

「おまえが魔王か？」

「……ここまで来て聞くか？ 知らないのなら帰ってもらっても……」

レオンが話していると不意に飛んでくる一本のナイフ。

「なっ！？」

レオンはそれを紙一重でかわす。……今のナイフに緑色の液体が塗られてたのは気のせいだろうか？

「？ どうかしたのか？」

にこにこしながらレオンを気遣う勇者。その顔には道化師のような嘘くさい笑顔。

「今の、おまえが投げたのか？」

「？ なんてことだ？」

「……………」

警戒するレオン。しかし勇者は笑顔をしわ一つ変えない。

「ところでおまえは誰なんだ？」

「……………」

また飛んでくるナイフ。しかも今度は5本同時に飛んでくる。

「ふん」

警戒していたレオンが、いとも簡単にそれをかわす。ナイフが玉座の背もたれに刺さる。

「方向はこいつからか……………」

「紅き地獄の刃よ、かの場所に刻みし門より、あの者に死を与えたまえ」

「なにっ！？ くそっ！」

「死刻ム爪しきくむづめ」

刺さっていたナイフの先端をつないでできた五角形の穴から血のように赤い刃が飛び出す。

「ちつ。これもはずれたか!!」

「やっぱりおまえか!!」

勇者の顔は先程の笑顔が無く、悔しさで歪んでいた。

「いまのが当たれば俺は魔王を倒した勇者だったのにつ! くそつ!!」

「あんな卑怯な真似をしてまで勇者になりたいのかよおまえは!!」

「ああそうさ。おまえを倒せりゃ、何をしたいといいんだよ!!」

「なつ!?!」

「死ねよ! おまえはただの、俺が勇者として有名になるための道具にすぎねえんだよ!!」

そういつてからナイフを構え、こちらに向かってくる勇者。

「誰が道具だつ!! 卑怯なガキめ!!」

レオンは勇者の腕を掴み、投げ飛ばす。

「おめえみてえな奴を勇者になんてさせるかよ!!」

「はつ。笑わせる。おまえに選ばれて勇者になるんじゃない、おまえを殺して勇者になるんだよ!!」

「おまえなんざに殺されるかよ!!」

「我に全てを焼き尽くす闇の炎を」

「黒き雷よ、かの愚か者に裁きを下せ」

二人は魔法を唱える。

「ダークネスボルト!!」

「滅びの火炎!!」

レオンが少し早く唱え終わり、黒き雷と紫の炎がぶつかり合い、消滅する。

「これで終わりにしようぜ!! 我は理性を捨て、狂気の鬼と化す」

「!? まさか!？」

勇者が自分の血で魔法陣を描く。

「契約を捧げ、我に力を」

呪文を唱え終わり、勇者の体が赤く染まる。

「ひやはははは! 死にな!!」

狂ったように笑いながら、赤い勇者はナイフを投げる。

「ちっ」

それを軽くかわすレオン。

「そこまでする意味があるのか！？　おい！！」

「オラオラオラア、とつとと死ねや。ひやははは！」

ナイフを投げまくる勇者。

「完全に狂っちまったか。しかたねえ」

勇者の背後に現れるレオン。その手には黒い、大きな鎌が握られていた。

「楽になれ」

ザシュツという嫌な音とともに勇者が倒れる。

振り下ろされた鎌が勇者の左肩から腰を斬っていた。血が流れ出す。

「ぎゃあああああああああ！！！！！！」

もがき苦しむ勇者。

「おまえがそんなの使わなきゃ、助けてやったのにな」

「くそがああああああっ！！　くそっ！　こいつさえ倒せばあつ！」

「地位やら名声やら、そんなもんを欲しがる理由がまるで分からねえ。なぜそんなもののおまえは狂う？」

「うるせええええ！！ 道具の分際で、俺に意見するんじゃない！！」

「あつぞ。救いようがねえな。ていうかとつと死ね」

「っ！？」

声を発することが出来たのは、そこまで。なぜならレオンの鎌によつてただの肉塊にされたから。

「……………」

広がる血の臭いと沈黙。

「……………お姫様たちが見ていなくてよかったぜ……………」

「……………」

「まったく、処理が、大変じゃねえか……」

「この際、バトラーでも呼んで片付けさせようか……」

「自分でやった方が早いかな」

そう言いつつ、レオンはそれを片づけ始めた。外には赤い月が不気味に輝いていた……

ある日、レオンはまた玉座にいた。

「おいバトラー、最近の人間どもの動きはどうなってるんだ？」

「また戦争をしていますよ。なんでもそれに巻き込まれた魔王もいるみたいですね」

「まだやってんのかよ。なんなら、俺が介入してだな……」



「駄目です」

「ちつ。いいじゃねえかよ別に」

「何度も言うようですがあなたは魔王なんですよ？ この城にいてももらわないと困ります」

「なんでだよ。勇者が来たら部下に戦わせりゃいいじゃねえか。なんならおまえが魔王になるか？」

「……その言葉を待っていましたよ」

「？ 今おまえ何て……」

「総員！ 配置につけ！ 今こそ下克上を果たすのだっ！！」

バトラーのかけ声に城にいた部下が集まり、魔王に武器を向ける。

「まずはそいつを追い出せ！！」

『おおーっ！！！！』

さらには魔王に武器をじりじりと近づけていく。

「へえ〜。いい度胸じゃねえか。一度城出て行ってやるから、準備しとけよ？」

レオンが不敵な笑みをしてから扉へ向かう。

「さらばだ。そして次に俺がここに来る時は……」



（後書き）

いちおうコメディーっぽくしてみました。シリアスなところもあります。どうでしたか？ 人気と気分しだいではこの続きから連載していきたいなと思ってます。

「本当に人気なんて出んのかよ、こんな微妙な作品で」

「本当です。連載も微妙ですし、話の流れも極端ですし」

「私たちもちよつとしかでてないしさ」

「そうそう。しかも一日じゃないじゃん！」

「……」

「……こんなみなさんですけど、よろしく願いします」

文才が凄く！自信無い……。

厳しい感想、お待ちしてます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9968n/>

---

暇な魔王の一日

2011年10月7日22時24分発行